

<p><b>5月17日</b> <b>(日)</b></p> <p>歴代誌下 29章</p>	<p>「主があなたたちをお選びになったのは、あなたたちが御前 に出て主に仕え、主に仕える者として香をたくためである」(1 1節)。ヒゼキヤは今までの礼拝の在り方を見直した。「私が何 者で、何のために存在するのか」を再確認した。私たちは生 命全体で主を賛美し、主の働きを担うことを託されている。主 イエスの生き方に倣い私たちが置かれている時代を歩みたい</p>
<p><b>18日</b> <b>(月)</b></p> <p>歴代誌下 30章</p>	<p>「ユダの全会衆、祭司たちとレビ人、イスラエルから来た全会 衆、イスラエルの地から来た寄留者、ユダに住む者が共に 喜び祝った」(25節)。エジプトから救い出してくださった主を 覚え、ユダの民も、イスラエルの民も、それぞれの地に住む寄 留者たちも共に主の前に集まり礼拝した。わたしたちの礼拝 共同体とはいったいだれが属することができるのだろうか。</p>
<p><b>19日</b> <b>(火)</b></p> <p>歴代誌下 31章</p>	<p>「ユダの町々に住むイスラエルとユダの人々も…自分たち の神、主のために聖別された物の十分の一を運んできて、 次々と積み上げた」(6節)。イスラエルの民もユダの民、主が くださるあらゆる恵みの十分の一を、主のために聖別して取り 分け、ささげていた。わたしたちは主から与えられている命、 時間、賜物の十分の一をささげていきたい。</p>
<p><b>20日</b> <b>(水)</b></p> <p>歴代誌下 32章</p>	<p>「彼らは城壁の上にはいたエルサレムの民に、ユダの言葉を使 って大声で呼びかけ、恐れと戸惑いを起こさせ、町を占領し ようとした」(18節)。アッシリア王センナケリブの家臣たちは、 エルサレムに留まっている人たちに、ユダの言葉を使って不 安を煽り、主なる神ではなくアッシリア王に従うよう感わした。 主の声以外に揺れる私たち。主の声に集中したい。</p>

聖書日課 『からし種』 2020.5.17-5.24

<p>21日 (木)</p> <p>歴代誌下 33章</p>	<p>「彼(マナセ)は苦悩の中で自分の神、主に願い、先祖の神の前に深くへりくだり、祈り求めた。…こうしてマナセは主が神であることを知った」(12-13節)。主は、どんな時でも私たちに語りかけておられる。主の前に立つとき、「私」と主なる神との関係を見直す機会が与えられる。祈り求めるとき、私たちは、私たちの主を知ることができる。</p>
<p>22日 (金)</p> <p>歴代誌下 34章</p>	<p>「あなたはこの所とその住民についての主の言葉を聞いて心を痛め、神の前にへりくだり、わたしの前にへりくだって衣を裂き、わたしの前で泣いたので、わたしはあなたの願いを聞き入れた、と主は言われる」(27節)。イスラエルの民には、いつも執り成し祈る存在が与えられている。執り成し祈る者の祈りを主は聞いてくださり、憐みを備えてくださっている。</p>
<p>23日 (土)</p> <p>歴代誌下 35章</p>	<p>「しかし、ヨシヤは引き返さず、攻撃のために変装して、神の口から出たネコの言葉を聞かなかった。そして彼はメギド平野の戦いに臨んだ」(22節)。王ヨシヤは、神の言葉に従うことなく、戦いへと出かけて行った。アハブ王と同じ最期を迎えた(列王記上22章)。人のただしさと神のただしさがいつも同じでないことを示される。主のただしさを祈り求めて歩みたい。</p>
<p>24日 (日)</p> <p>歴代誌下 36章</p>	<p>「こうして主がエレミヤの口を通して告げられた言葉が実現し、この地はついに安息を取り戻した」(21節)。南ユダ王国がバビロニアによって滅ぼされ、「この地はついに安息を取り戻した」という。逆に言えば、ダビデ家の王たちが君臨した間、地上に主なる神の安息は失われていたのである。今、私たちの国には主なる神の安息が実現しているだろうか。</p>